

当面のスローガン

- 本年こそ「人権侵害救済法」を制定させよう!
- 狭山再審闘争の勝利をかちとろう!
- 続発する差別事件の糾弾を徹底しよう!



発行所
解放新聞和歌山支局

〒640-8314
和歌山市神前 405-3
TEL 073-473-2301
FAX 073-473-2302

発行責任者
中澤敏浩



松本貞次・副委員長

はじめに、松本貞次・副委員長からあいさつがあり、司会の池田清郎・県連副委員長から、DVD「逃げ遅れる人々」の説明があった。

解放学校で試写した「逃げ遅れる人々」は、2011年3月11日に発生した東日本大震災で、震災弱者にならざるを得なかったかたが記録されている。障がいがある

あることで避難することも難しく、また避難所では迷惑をかけることを恐れ、避難区域に取り残されざるを得ない現実が記録されていた。

まとめ藤本哲史・県連書記長から「和歌山県でも防災計画を出そう」としているが、予想以上の地震が発生するといわれている。行政が策定した防災計画が命を考えたものになっているのか、支部や地域で考えてほしい。障がい者、高齢者、

すべての人を意識した
防災計画を
解放学校

県連解放学校を7月7日、プラザホープでひらき、各支部より約90人が参加した。

1日目は、湯浅城に集合し、13時半からなぎの里ゲートボール場で第23回ゲートボール大会をひらき、混合チームをあわせた4チームが交流試合をした。飛び入り参加者も含め、わいわいとしながらも白熱した試合であった。また、ゲートボール以外の参加者は総合センターに移動し、県レクリエーション協会の吉田ひとみさんを講師に招き、さまざまなレクリエーションで体を動かした。参



あいさつする竹井輝夫・会長

加者は、介護予防のための柔軟体操やジャンケンゲーム、自律神経のバランスを整える体操などを吉田先生の指導でおこない、会場内は笑いに包まれ、汗ばむほど元気に体を動かした。さらに、夜の懇親会には石本一也・湯浅支部長から差し入れがあり、松本貞次・県連副委員長から「みなさん、元気に湯浅の地に集まってくれてうれしい。中澤敏浩・県連委員長を先頭に、住みやすい世の中にしていきましょう。心から敬意を申し上げます」とあいさつがあった。つづいて、竹井輝夫・高連

高連協第23回総会
ゲートボールや自慢ののどを披露

6月27日、28日に一部落解放第24回高齢者交流集会・第23回ゲートボール大会および部落解放和歌山県高齢者連絡協議会第23回総会」を湯浅町でひらき、15支部68人が参加した。

協会長の乾杯の音頭で宴がはじまった。カラオケタイムに入ると、参加者は次から次へと自慢ののどを披露し、笑いの絶えない懇親会で一日目を終えた。

2日目は、高齢者連絡協議会第23回総会を9時半からひらき、解放歌合唱、水平社宣言朗読(北内ますみ・執行委員)のあと、竹井・同会長から「いつも言うことだが、健康が一番。余談だが、麻生太郎・副総理の発言で『飲みたいたけ飲んで、食べたいだけ食べて、



ゲートボールをする参加者



健康体操のようす

子どもたちは、たちまち命に直結する。地域でのきめ細やかな防災計画を策定してほしい。阪神・淡路大震災で、聴覚障がい者ががれ

勝手に糖尿病になって、その医療費を払わなければならぬ。延命措置について「さつさと死ぬるようになってあげたらいい」などの発言があったが、もつてのほかに、高齢者としての立場で、高齢者としての役割をしっかりと元気で果たしていきたい」と力強いあいさつがあった。つづいて、池田清郎・県連副委員長から来賓あいさつを受けた。経過報告(金本清春・同副会長)、運動方針(吉田雪子・同副会長)、総会宣言(橋本正春・副会長)と議事進行し、最後に清水節子・同副会長から「今、日本は危機に陥っている。改憲論があるが、公益に反すればデモも発言もできなくなる。国が国民を支配するといふ大変怖いこと。戦前・戦後と苦労してきた私たちが、やっとこんな元気に集まれているのに、またあの時代に帰ろうとしている。大事な憲法を変えさせず、孫子の代まで自由な国でいられるように、皆と一緒にがんばっていききたい」という閉会あいさつで終えた。

つづいて、中山誠司・県福祉保健部長寿社会課班長を講師に「高齢者を取り巻く状況と介護保険制度」について、参考資料やパンフレットをもとに学習した。

きの下で被災した話を聞いた。命を最優先にすべての人を意識した防災計画をとまとめた。

頑健

今、アメリカで「黒人少年射殺事件」の裁判の評決が大問題となっている。事件は、知人の家を訪ねる途中の少年が、自警団の白人男性に

後をつけられ、果てに射殺されたもので、当初から正当防衛として警察の調べもなかった。しかし、地元住民の強い抗議のなかで裁判が開始され「無罪」という評決になったのである。この結果に「人種差別判決だ」として、抗議の声が広がり、オバマ大統領が、自制を呼びかける事態にまで発展した。被告は「不審者」「抵抗をした」「身の危険を感じた」と主張、しかし被害者は、丸腰の高校生である。もし、少年が黒人でなかったら？銃がなかったら？そして、自警団？さまざまな疑問が出てくる。明治の頃、和歌山でも同じような事件が起きた。あることをきっかけに、詰め寄った部落の住民を警察官がサーベルで切りつけ何人にも怪我を負わすという事件で、その警官は「正当防衛」として不問にされ、反対に多数の住民が逮捕され有罪となった。理由は「部落の住民はなにをするか分からない」ということだ。100年の時を経て起きた二つの事件の背景に、極めて露骨な偏見・差別意識があることを否定できない。日本に話を移すと、最近の「出自」を探るといふ事件を見るまでもなく、100年後の今も、その背景は変わっていない。(S・I)